

国立歴史民俗博物館
情報資料研究部助教授

八重樫 純 樹

学会の通信誌に、私事を述べることは非常に恐縮であるが、小生の子供の一人は精神障害で現在養護学校の中学部に通っている。異常が明らかになってきたのはウロチョロあるきだすようになってからである。その後、車の事故やら、親の不適切な対応が続き、心を閉ざし続け、彼の言語処理機能は停止し、したがって社会的対応機能は極めて遅れている。彼の現在の状況は先天的要素が大きいのか、なかなか判断のつかないところが、あちこち施設を歩いた割には、対応に混乱をきたし続けてきた原因でもあった。

ところで、以前本誌で「土偶」データベース研究会の紹介をさせていただいたが、データシートもかなり集積されてきた一方、実は歴史的資料データの本質に関わるような問題が山ほど出て来て、こちらもしささか混乱気味である。問題によっては歴史的資料に関わりなく、一般的問題でもあり、また第三者によるデータ収集の初歩的な設定ミスもある。いずれこれらはまとめて明らかにしてゆかねばならない。

思いもかけない様々な方々から協力の申し出を受け進んでいるが、このなかで、じつは“オヤ”と思える立派な土偶の写真が送付されてくることがある。たいてい出土地は不明か裏の畑からの表面採集であり、亡くなったおじいさん、あるいは先祖からの伝来品である場合が多い。

考古学調査による出土品である場合、信用おけるが、このような場合、いかに取り扱うべきか頭

を抱えてしまう。過去の贋作であるのか、実は社会的に埋もれていたものであるか、即断はしかねる。

また、一方で博物館、資料館、大学以外にマニアによる個人収集の資料も相当あり、この存在の取り扱いも頭を抱える次第である。これらは、大事にされている場合がよくあり、情愛のこめられた資料である。学術データとしての客観性の問題を越えたところで話をもってこられると対処に困ってしまう。

考古学資料に限らず、歴史系資料は過去からの累積性を持ってはじめて学術的価値を有してくる。「土偶」に限らず今後行われるであろう様々な歴史的資料データの集成にはこの種の話がついてまわるであろう。

「土偶」データの形式整理も実は多くの時間がかかり、何とか整理ついたのであるが、現在手掛けている他の資料も整理に時間がかかっている。時間をかけないデータはたいがい後で矛盾をきたし、混乱してしまうか、どうにも発展しようがなくなる場合が多い。

資料にたいする専門家や協力者の博愛や思い込みのベールをどのようにクリアするかが本質に迫る第一歩であるようだ。

冒頭に述べたわが家の“彼”に対する混乱も、実は親に、この点が完全に欠落したのではないかと思う。はたして可能なことであったか、今後可能であるのか、……。まったく自身がない。

大杉治郎先生を偲ぶ

東京大学理学部 田 隅 三 生

本会コデータ部会部会長大杉治郎先生は去る8月12日すい臓がんのため永眠されました。慎んで哀悼の意を表します。

大杉先生は1943年9月京都帝国大学理学部化学科を卒業され、1948年11月同大学理学部化学科講師、1953年10月助教授、1962年4月教授となられ、1983年に定年で退官されるまで物理化学講座を担当されました。先生の研究内容は物理化学の広い分野にわたっており、250編を超える研究論文と著書を公表されました。とりわけ高圧下の物理化学的現象の研究においては、我が国のリーダーとして国際的活動を精力的に展開されました。先生の研究業績をごく短く紹介すると次のとおりです。

〔1〕他に先駆けて、10万気圧以上の静的圧力を発生させることのできる六面体アンビル装置を開発し、これを用いて高温高圧下における無機化合物の合成とその速度論的研究、無機及び有機化合物の相転移の研究、新高圧相に関する研究を行った。この高圧発生装置の開発により1964年毎日工業技術奨励賞を受けた。

〔2〕電解質溶液を対象として、アルカリ金属イオンの水和水の数に対する圧力や温度の効果を詳細に研究し、従来の定説に反して、その数が圧力にほとんど依存しないことを見出した。また、比較的大きな一価金属イオンの過冷却水溶液の高圧下電気伝導機構について新しい説を提出した。

〔3〕溶液反応の動力学的研究において、反応速度定数の圧力による変化の割合（活性化体積）が溶質－溶質－溶媒相互作用に敏感で、反応機構解明にとって重要な量であることを多くの反応例について実証した。

また、初めて高圧ストップフロー法の開発に成功し、溶液反応について素反応レベルでの圧力効果研究に道を開いた。

大杉先生は京都大学の学内諸施設の教授を兼任されるなど学内で重責を果たさせると同時に、学外においても日本学術振興会基礎化学研究助成会専門委員会委員長、日本科学技術情報センター熱物性データ委員会委員長等を歴任され、学術の発展に多大の貢献をされました。また、国際高圧力科学技術振興会（AIRAPT）の創立に参画して副会長を務められ、1974年には第4回高圧力国際会議の組織委員長として同会議を成功裡に開催されるなど、国際交流の促進に尽力されました。

京都大学退官後は大阪工業大学教授と（財）生産開発科学研究所学術顧問・熱物性研究室長を兼務される一方、1984年末からコデータ日本代表及び日本学術会議学術データ情報研究連絡委員会委員長に就任され、学術データ活動の振興に努力を傾けられました。研連の活動としては、日本の科学・技術分野のファクトデータの所在に関する調査を行い、その結果をまとめた「日本のデータベース」を1988年3月に公表されました。また、コデータ関係の活動としては、東アジア諸国におけるデータ活動の活発化と国際交流を計るため、コデータ本部の許可を得て、CODATA Task Group on East-Asian Data Sourcesを組織され、CODATA BULLETIN, Vol.21, No.3 (1989)にCODATA Directory of East-Asian Data Sources for Science and Technologyを出版されております。さらに、大杉先生はこのタスクグループ主催の第1回国際集会を1987年に東京で開催されました。第2回会合は1988年に1988年11月に北京で行われましたが、大杉先生はその直前に病に倒れられて参加されませんでした。その後回復されたかのように見えた先生は、第3回会合を京都で開くべく、死去の直前まで一方ならず努力されました。さぞかしお心残りであったことと拝察されます。しかし、大杉先生の御遺志をついだ高柳和夫現研連委員長らの多大な努力により、第3回会合は予定どおり1990年3月に京都で開催の運びとなり、大杉先生の御霊も安んじてくださることと存じます。

コデータ部会としては、部会長を失ったことは大変な痛手ですが、データ活動に対する大杉先生の情熱を受け継ぎ、部会を発展させることが先生のこれまでのご指導に報いることとなると存じます。この場を借りて、会員諸氏のご協力をお願い申し上げます。

※コデータ部会から

大杉治郎部会長の死去に伴い、田隅三生副部会長が部会長に就任することとなった。

印刷用カラーデータベース

凸版印刷株式会社 大 野 仁

〔1〕はじめに

昭和54年に製版・印刷業界に大反響を与えたトータルスキナも、すでに600台以上が稼働している。当初はクリエイティブ機能を商品コンセプトにしていたトータルスキナは、次第に本来の合理化目的である集版機能が重視されるようになった。この要望に答えるべく各種のシステムが発表され販売されている。また周辺機器や他システムとのインターフェイスもさかんに行われるようになった。例えば、電算写植システム（CTS）やデザインワークステーションとのインターフェイスもその一つであり、トータルスキナを中心にした今後の動向が非常に楽しみである。

〔2〕印刷用カラーデータベースの要件

印刷物は手に取ってじっくり見られる場合が多い。時には印刷物の良し悪しで商品価値が決定されてしまうケースもある。カタログショッピングや無店舗販売では、顧客がカタログのみで実物を見られない場合も多い。写真を単に印刷物にするケースは少なく、商品イメージを多少誇張する場合が多い。

また製版サイドから見た時、デザイナーの嗜好的な要素が強く、対象となる写真も各種様々である。いづれにしても大変に高品質なものが要求される。次に考えられるのは、データ量が膨大であるにもかかわらず、簡単に検索し、必要な時に見られなければ意味が無い。画像のデータ量は文字データのそれと良く比較されるが、印刷の場合にはテレビ等に比べてもスミ版が存在する分データ量は多くなる。逆に言えば大きな記憶媒体が必要になる。またデータベース化された画像データを運用する際には、登録されたデータがそのまま再利用されることは少なく、誇大・縮小・回転処理が必要になったり、トリミングの変更が多いことである。大量のデータを高速に画像処理しなければならない。もう一つ重要なことは、画像データ

ベースに登録されたデータのみで仕事ができないことと、タイミングの問題である。この他にもいろいろ考えられるが、印刷用カラーデータベースに要求される要件は多い。

（1）高品質なデータであること

高品質には大きく二つの意味がある。第1番目はレゾリューション（解像力）である。写真の内容にもよるが、一般的な画像で12本～14本/mm以上のレゾリューションが要求される。細かい模様のある写真や金属的なもの・直線の多い家具等はそれ以上のレゾリューションが要求される。階調としては8ビット（256階調）で表現されるケースが一般的である。現在の日本、それからアメリカで採用されているNTSCテレビの走査線は525本1枚の絵を作っていることを考えるとたいへんな量と言える。（但し、テレビは1秒間に30枚の絵を見せている。）2番目は色修正の問題である。カラー写真を撮影する際の条件をあれこれ考えても完全な写真が撮れるとは限らない。色の反射や映りこみはどうしても避けられない。更に写真そのものの再現性もあって、実物が実物通りに撮影できるケースは少ない。またモデル自身に問題があったり、例えば空の“スカイブルー”や“湯上がりの美人肌”のようにイメージとして人々の頭に焼きついている場合がある。更に、印刷物で写真の合成（モンタージュ）をしたりキリヌキをする事も多い。

（2）データ記憶媒体の容量が大きいこと

画像のデータ量の大きさを表現するため、前述のように文字と比較する場合がある。漢字は2バイトで表現される。この値は、どの位の値かというと、通常フロッピーディスク1枚が大体、1メガバイトぐらいの容量であるから、ごく単純に考えると50万字のデータがフロッピーディスク1枚に入ることになる。印刷用の画像データを、14本/mmのレゾリューションで1画素当り8ビ

ットの階調をもたせ、イエロー・マゼンタ・シアン・ブラックの4色で登録するとする。印刷サイズは4×5インチ（10 cm×12.5 cm）とした時のデータ量は、 $(100\text{ mm} \times 14\text{ 本/mm}) \times (125\text{ mm} \times 14\text{ 本/mm}) \times 1\text{ バイト} \times 4\text{ 色} = 9,800,000\text{ バイト} = 9.8\text{ メガバイト}$ となり、漢字が約500万字表現出来ることになる。この他にも前項で述べたキリヌキマスクが必要な場合を考えてみる。キリヌキマスクはデータをどの様な持つかによりデータ容量算出方法も変わってくるが、ここでは写真と同じ様な持ち方として考える。但し、マスクの必要があるか無いかの2値であることと、レゾリューションは5倍ぐらい必要になることが大きくかわる。データ容量は（前記サイズの場合）、 $(100\text{ mm} \times 70\text{ 本/mm}) \times (125\text{ mm} \times 70\text{ 本/mm}) \times 1/8\text{ バイト} \times 1\text{ 色} = 7,656,250\text{ バイト} = 7.7\text{ メガバイト}$ となり、これまた大量な量である。カタログ・パンフレットではキリヌキマスクが必要なケースは非常に多い。この場合には、データ量は合計で約17メガバイト必要になる。この様に印刷物のカラー写真をデータベース化するには莫大なメモリが必要となる。

（3）アクセススピードが速いこと

画像のデータ量が極めて大きく、確認、チェックのためにカラーモニター上に再現する場合を考えると、見るスピードすなわちアクセススピードが速いことが必要不可欠になってくる。このためには、確認・チェック用として予めスモールファイルを作成しておくことも有効である。

（4）拡大・縮小・回転・トリミングおよび集版機能があること

カタログ・パンフレットにおけるカラー写真の流用率が高かったり、印刷物から他のメディアに展開するマルチメディアについてはすでに述べた。このような再利用時に、データベースに登録したカラー写真をそっくりそのまま利用することは少ない。ほとんどの場合、拡大・縮小・回転およびトリミングの変更が伴う。例えば、ある新製品があり、初年度は大きな写真としてカタログに掲載したが2年目からは半分のサイズに縮小したり、逆に目玉商品として前回より大きく拡大して掲載する場合もある。またデザイン効果を狙って、登

録した写真に回転を加えたり再トリミングをする。このような画像処理で常に問題になるのが処理時間と品質である。処理時間については、コンピュータの高速化により実用レベルにあると考えて良い。もっともこの処理時間については、新規に作業をする場合との比較であり、プロダクション側の問題である。次に品質についてだが、コンピュータの計算上は拡大・縮小は無限と言っても良い。カラー写真の内容やクライアントにもよるが、一般的には登録したデータの250%～300%が許容範囲と考えられる。このように印刷物を作る目的で写真の再利用をする場合は、これらの処理が必須となる。しかしながらこれらの処理は、単にカラー写真の部品の一部を作成したにすぎず、平網・罫・ポジショニング（製版配置）等の集版機能となる。

（5）画像データと付随情報の連携が保たれ検索し易いこと

カラー写真がデジタル信号として、大容量記憶媒体に登録されただけでは意味がない。どういう写真なのか、どういう略歴を持ったデータなのか、また必要な際に検索・管理をするためのキーワード体系はどうあるべきか。これらは特に印刷用カラーデータベースに限らず、通常のデータベースを考える時でも大切なことである。

（6）最低限の特殊処理が出来ること

本システムは、特殊処理は基本的なコンセプトから除いてある。但し、最低限必要と考えられるピクセルコピー、調子修正等は機能としてないとシステムとして硬直してしまう。

（7）外部のシステムとインターフェイスが取り易いこと

すでに製版部門にはトータルスキャナが多く設置されている。これららのシステムは特殊処理をはじめ豊富な機能が搭載されているため、これらとのインターフェイスが必要である。また各種コンピュータグラフィックスやマルチメディアに対応できるシステムでなければならない。

以上のように印刷用カラーデータベースを設計する時に考えなければならない事は多い。この他にも大切な事は多く、例えば原稿類が入ってくる

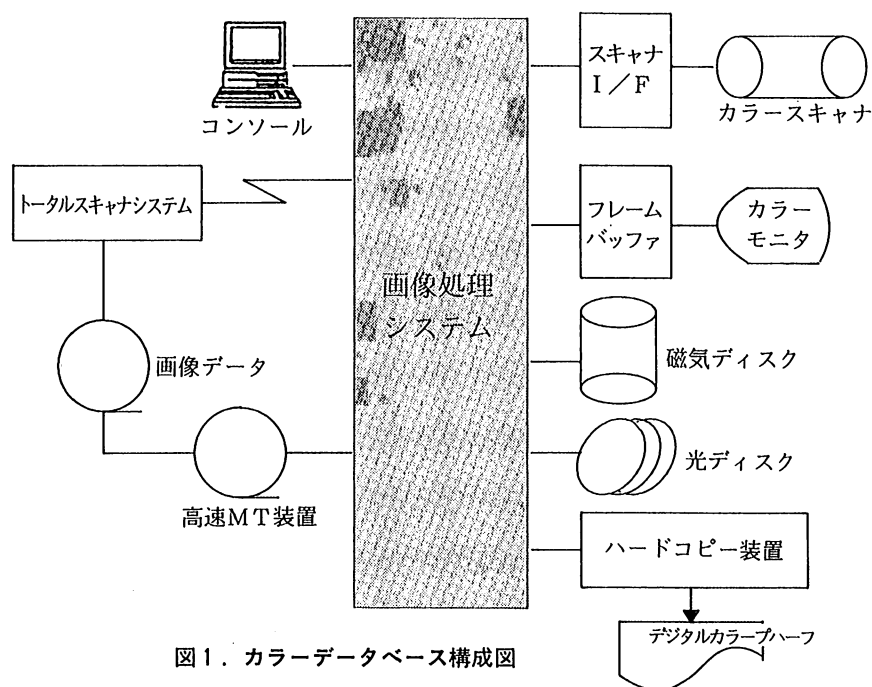


図1. カラーデータベース構成図

タイミングのずれ、赤字と称する訂正にはどのように対応するか極めて重要である。

〔3〕印刷用カラーデータベース

今まで述べたことを念頭において、印刷用カラーデータベースを開発した。その構成を図1に示す。

（1）作業フロー

データベース化するカラー原稿は、システムに接続されているカラーキャスナを用いてY、M、C、Kに分解しデジタル化した後、磁気ディスクに登録される。この段階でデジタルカラープルーフや従来通りの校正刷りを行い品質のチェックを行う。次に、ここで指摘された赤字内容をもとにシステム内の画像データを画面に呼び出して修正する。主な修正としては、色調・階調の変更であるが、得意先の要望によっては、電線を消去したり・肌色を大幅に修正したりする。ここまでの作業は、市販のトータルスキャナで実施することも可能で、画像データを磁気テープでデータベースシステムに渡すことができる。画像の検索はコンソールより行い、フレームバッファを通してカラーモニター上で確認する。検索用のキーや付属情報は予め入力し、登録する。さて先程要望通り修

正された画像データは光ディスクに登録されるが、本システムの場合光ディスクをオートチェンジャー装置により更に大規模に管理している。一元的に管理できるカラー枚数は、4～5万枚であり大きなカタログでも問題なく登録できる。このようにして画像データは登録される。次は運用であるが、再利用する原稿コードと指定倍率を入力する。これはコンソールより行うが、実際の検索内容は得意先によって千差万別であり、データベースシステムに要求される機能は様々である。一方製版に必要なレイアウト情報はシステムにオンラインで接続されている作図ワークステーションによって行われる。このデータはフロッピーにストアされ、コンソールを通してシステムに入力される。システムはオートチェンジャー内の所望の光ディスクを自動選択し、必要な画像データを読み出し、所望のサイズに拡大・縮小などを行いながらレイアウト処理を完成する。

次にマルチメディア展開は、システム内に登録されている印刷用の画像を多種のメディアへ展開出来るように工夫されている。高精度に入力された印刷用の画像データを流用するため、新しく作成される画像データも高品質である。CD-1、

CD-ROM といったパッケージ系、ビデオ系、ハイビジョンといった広範囲なメディアへ応用ができる。

(2) 外部メモリー

記憶媒体として、一般的にはフロッピーディスク、磁気テープ、磁気ディスク、光ディスク等があるが、カラー写真の画像データとなると非常に大容量となる。メモリーの価格とアクセス時間から判断されるが、結局のところは光ディスクか磁気ディスクあたりが最終候補として残る。両者の性能を比較してみると、単体当りの記憶容量は光ディスクの方が有利である。スペースの狭い製版現場を考えると、この点でも同じことが言える。逆にアクセス時間を考えると、磁気ディスクがよくなる。一般的に言われているようにシーク時間で光ディスクが不利である。まとめて見ると、光ディスクの場合は、容量的には大きい、アクセス時間は余計にかかる。一方磁気ディスクは、容量的には不利であるが、アクセス時間は有利である。この他に品質的な問題としてエラーレートがある。従来は光ディスクの場合、このエラーシートが悪く使用出来なかったが、次第に改善され外部メモリーとして使用できるようになった。本システムでもこのような特徴を生かしながら、両ディスクを使いわけしている。光ディスクと一口に言っても、いろいろなタイプがあるが、ここでは追記型と書き換え可能型について触れてみる。追記型はドロタイプとかライトワンスとも呼ばれ、ユーザーが書き込んで再生も出来るが一度書いたらそれで終わり、通常フロッピーディスクのように書いたり消したりが自由に出来ない。書き換え可能型はイレイザブルタイプとも呼ばれ、ユーザーが書いたり消したり何度も自由に出来る。このタイプはごく最近実用レベルのものが販売されるようになってきた。本システムでは追記型の光ディスクでしかもオートチェンジャータイプを使用している。これは書き換え可能型の適当なものが入手できなかったためである。今後はそれぞれの性格を上手に使いわけしていく必要がある。

(3) 検索システム

本システムでは、データベースをサポートするターミナルが、画像データの各種情報の管理・検

索やその他前処理を行っている。例えば、商品カタログの場合、データベースを構築する際、商品ジャンル、商品コード、価格、サイズ等々が検索キーとして使われる。これらのキーで検索すると、この商品に関する略歴が画面に表示されたり、リストとして出力される。また構築の際、カラー写真が校了になるまでは、データベースのメンテナンス機能としては、画像・索引データの更新・削除、削除データの復活・索引ベリファイのデータの作成が可能となっている。このターミナルで検索した情報は、フロッピーディスクを通してターミナルから画像処理本体を通じて、光ディスクにわたり、必要に応じて光ディスクを反転し最も効率良く所望の画像が得られる様になっている。オンライン形式としたのは製版の入稿タイミング賀ずれるケースが多く、運用し易いためである。

(4) 画像の拡大・縮小

再利用する際はほとんどの場合、拡大・縮小が伴うのでこれについて説明する。デジタル画像処理において、拡大・縮小したり歪みを修正する補間が利用される。補間は離散的なサンプルから、その中間の連続的な事象を見積る操作である。代表的な補間方法としては、最近傍法・線形・2次関数補間・キュービックコンボリューションがあり、本システムでもこれらのこれらのアルゴリズムを利用している。ただこれらのアルゴリズムは一つとは限らない。カラー写真の絵柄、入力レゾリューション、拡大・縮小倍率によって変える必要がある。

[4] 終りに

プリプレス部門のコンピュータ化・エレクトロニクス化が大変な勢いで進められている。トータルシステム・電算写植システム (CTS) ・デザインワークステーションの機能の充実が目を見張るものがある。ユーザーにとっては、これらのシステムが有機的にリンク出来れば好都合であるが種々の制約によって必ずしも容易ではない。カラー写真のデータベースシステムは、このような背景にたって自社開発したものである。今後ともメーカーの皆様の協力をお願いする。

σκέτο

境界領域に建った大学院

大阪大学言語文化部言語工学部門

三木 邦弘

この春大阪大学言語文化部に大学院が設立されました。もともと言語文化部は、昭和49年に教養部から語学を教えてた教官が分離独立して誕生しました。これまで自前の学生（学部生）が全く居なかったところに、26名の院生を突然迎えて、まだ様々な混乱状態から完全に抜け出したとは言えないところです。

正式名称を大阪大学大学院言語文化研究科というこの大学院は、「言語文化論」、「国際コミュニケーション論」と「言語情報科学」の3つの領域を主たる内容としています。この中で「国際コミュニケーション論」は、複数の言語、文化を十分知らなければ論じられませんし、「言語情報科学」では、言語を知り計算機を十分使いこなすことが要求されます。そのような点でこの大学院は従来の文学部や工学部等の大学院と比べて境界領域にあると言えるでしょう。そこで大学院としては、文系と理系の双方から院生を迎えたかったのですが、今年度は文系出身者のみになりました。来年度こそはと、今度は夏と冬に2回募集及び試験を行う事になっています。

今年の入学試験はどのような研究を行いたい論文にまとめるものでしたが、合格者の約半数がコンピュータを使って何かすると言ったものでした。ところが、論文にはそう書いたものの殆どの院生はパソコンとワープロの違いすら知りませんでした。このように意欲はありながら、境界領域において必要とされる複数の領域に対する知識を持たない者にはどのように対処して行きましょうか。最初からそんなに幅広い知識を持つ者のみを期待するのは無理でしょう。しかし学部と違いますので正規の講義にて各領域を初歩から扱う訳にはいきません。演習の時間にパソコンの電気の入れ方からやってはもらえませんが、その付近のレベルで躓いている者も少なくありません。とにかく各自の自習に任せていては、短い2年間の修士課程では十分な成果をあげることは不可能です。

現在は2～3人ずつグループにして、パソコンの操作やプログラミング言語等を正規の講義とは別に教えています。大勢まとめてやるのは、空いた時間やパソコン等の機材が揃わない上に、個人差もかなりあるので難しいようです。計算機の使い方は修士論文をまとめる為の手段故に、落ちこぼれが許されないので大変です。

来年度にもし理系出身者が入学してきたら、逆に計算機は使えるがその他の言語学的な知識に欠ける者がいるかもしれません。最近よく話題になる境界領域ですが、元になるどちらの領域も中途半端でない人材を育成する大学院を作るのは結構難しいようですね。

データベース'89T O K Y O

「データベース'89 TOKYO」は、9月5日（火）～7日（木）東京池袋サンシャイン・シティ文化会館2階ユニバーサル・ホールで、（財）データベース振興センター（DPC）および日本データベース協会（DINA）の主催で開催され、参加出展企業・団体は実に64社・団体であった。

過去、データベース・フェアと呼ばれる展示会は、（社）情報科学技術協会の主催によるデータベース・フェアが都立産業会館（東京浜松町）で毎年開催され、87年の第6回まで実施されていた。（第6回で終了）

関西地区では、関西データベースフェアが関西データベース協議会の主催で開催され、本年も「'89関西データベースフェア」として、11月28日（火）～30日（木）、OMMビル（大阪マーチャンダイズ・マート）で予定されており、今年で第5回目となる。

* * * * *

今回の「データベース'89 TOKYO」は、その内容・規模からいって、わが国で初めての総合的なデータベース展と呼んでもよいものとなった。出展企業にとっては、88年に、東京ではフェアが開催されず、ヤキモキしていた背景もあり、今回の出展内容は、各企業とも非常に力を入れたという印象を与えるものとなった。

ご存知のとうり、データベース業界は年率約20%の成長をとげている分野（通産省：「特定サービス産業実態調査」）であり、1986年売上高1,143億円、1987年：1500億円（ただし、同調査では、データベースサービス業の区分が変更されているので、数値補正を行った）と着実に伸びている。またこの業界の大きな特徴は、各種の企業が新規事業、多角化の時代の流れの中で、この分野に参入してきているということである。（図1）

* * * * *

さて、今回のフェアでまず第一に目を引いたのが、マスメディアと呼ばれる、新聞社・放送業社の出展である。日本経済新聞社、日刊工業新聞社はもとより、朝日、毎日、読売、中日の各社。そ

してNHK情報ネットワーク（NHKのデータベース販売代理店）など、これらの企業が新聞作成時、番組制作時に取り扱う記事や放送内容が情報そのものであり、これを整備（データベース化）することによって新しい商品価値が生まれることに気づき、やっとその整備が完了したことを裏付けているものであるといえよう。

* * * * *

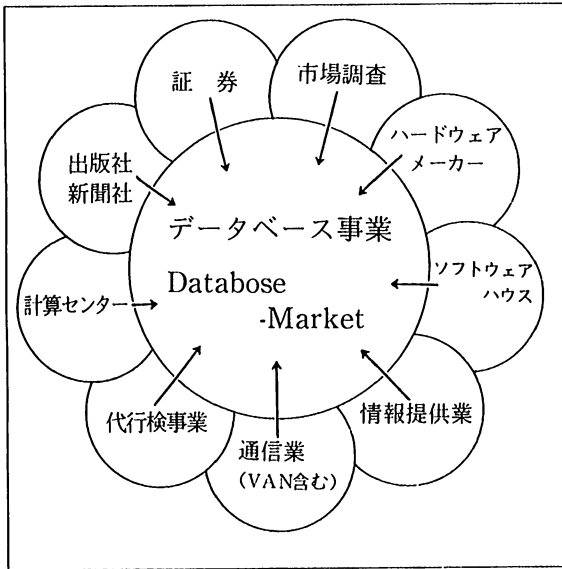
データベース業界で、現在一番注目されているのが、「CD-ROM」関連の業種に、着手している企業である。データを蓄積する媒体としてのCD-ROMは、新しいメディアとして威力を発揮する、各種の情報がCD-ROM化されることによる今後の発展は測り知れないものがあり、印刷媒体に変わる新しいメディアとして、凸版印刷や大日本印刷など、印刷業の各社が、本格的に取り組んでいる状況が理解できた。

FIX（固定）された情報、すなわち百科事典、辞書、名簿などは、CD-ROMに合致した情報群であり、すでに多くのものがCD-ROM化されている、同時に静止画や動画の処理も可能なこのメディアは、富士通のFM-TOWNSに代表されるリーダー（CD-ROM読み取り装置）装備のパソコンの普及と相乗して、大きな変貌をとげる分野となるであろう。

* * * * *

「情報の受け手から、情報の発信基地へ」の地域の動きは、今回参加出展した九州経済調査協会や東海北陸データベース懇談会の活動に代表されて積極的である。しかし、今回のデータベースフェアでは、「やはり情報も首都圏一極集中なのか」という印象を強く感じさせてしまった。実際に3日間のフェアの来場者数が、第1日目6,916人、第2日目7,896人、第3日目1万2,528人と、総計2万8,340人であった、昨年の「関西データベースフェア」の来場者が同3日間で、3,300人と比較してもわかるとおり、出展企業にとっては、費用対効果を考えた時、地方での参加は、どうしても二の足を踏んでしまうことになってしまう。

図 1



* * * * *

費用対効果の問題について、もう二つ今回のフェアについて問題点を指摘しておきたい。その一つは、現状のデータベース業界において、今回のフェアにおける各出展企業は身分不相応であったということである。展示ブースの装飾、ナレータの採用によるプレゼンテーションなど、二年越しのお祭りであるとの意見もあるが、データベース業界全体を見廻してみるに、事業として一人立ちしている企業は、いまだ数えるほどしかないのが現状である。

もう一つは、これはフェアとか展示会の欠点であるともいえるが、展示の華やかさや、ブースの与える印象ばかりが来場者の目を引いて、実際にデータベースを構築する技術やデータベースのキーワードの付与方法、サービスしているネットワーク（回線関係）、使用しているDBMS（データベース検索システム）など、裏方で作動しているシステムが表面に出てこないという問題である。例えば、平和情報センターが、富士通のAN回線と組んで実施しているG-SEARCHなどは、今後のデータベース・サービスの一つの大きな活路である、ゲートウェイ方式の実証システムであるにも係わらず、来場者の理解を必ずしも得られていたとは言えないのは残念であった。

* * * * *

本フェアがDINAの10周年記念行事の一貫で

あるという意味もあって、参加出展企業は、データベースのプロデューサーやディストリビュータ、あるいはエージェントという商用データベース業界が中心になってしまうのは、しかたのないことであるが、多くの来場者が、個々に自社内データベースの構築という課題をかかえており、今後企業内データベースの構築という、企業の経営戦略システムの中核となる情報武装をいかにすべきかという具体的なテーマを持って来場されていた。このことは、商用データベースのコーナーに関心を寄せる人よりも、キーワードの自動抽出システムHAPINES（ハピネス）、個人や小企業が独自にデータベースを構築するのに役立つパソコン・ソフト「FreeBase」（エム・シー・ワードセンター）、カード型可変長の汎用データベースソフト「アップピア」（エイビス）などに多くの来場者が関心を示していたことが如実に物語った。

* * * * *

今回のフェアで不参加であった大手の商用データベースは、東洋情報サービスの「BRANDY」（商標）ぐらいのもので、大半の商用データベース・センターは参加していた。もう一つ、日本IBMの不参加もあったが、日本IBMのNMS（ネットワーク・マネージメント・サービス）の充実としての商用データベースの構築およびサービスはNMSに多くの企業が参加し、商用データベースが利用可能になった今日、呼び水として自社によるデータベース・サービスは一段落したと考えるのが賢明で、7月末の日経ファイルの撤退など、今回のフェアは時期的に参加は不可能な状況にあったといえよう。

* * * * *

全体的に評価して、「データベース'89 TOKYO」は、成功裡に終了したといえよう。

しかし、展示の方法、来場者の満足度など、今後工夫を要する課題は残ったと思う、いずれにしても、2万8,000人の来場者が示すとおり、一層の発展が約束されている追い風の業界であることは確かであるとの印象を強くしたフェアであった。

(株)三菱総合研究所

白石 昭

ONLINE⁸⁹ INFORMATION

12-14 December 1989 — Olympia 2, London, England

Advisory Committee

Steve Arnold
Data Courier, USA

Tomas Baiget
CIDC, Spain

Pat Baird
University of Strathclyde,

Arnoud de Kemp
Springer-Verlag, FRG

Patrick Gibbins
Pergamon Compact Solution
UK

Message from the Chairman David Raitt, The Netherlands

Many years ago when I took an Air India flight (regretfully only on a leg within Europe!) I was assigned seat number 13A. I couldn't find the seat, neither could the cabin crew and nor could the captain who happened along just then. Row 13 it appeared didn't exist on the plane. Since then I've noticed that other airlines also do not use Row 13. The number 13 is often left out of house numbers and hotels and office blocks sometimes have no designated 13th floor. An exception to this dropping of the number 13 in a series is to be found in the library, information and publishing industries (actually the calendar doesn't drop it either — but look at the trepidation when Friday 13th comes

around!). We always have, for instance, a volume 13 in both journals and book series and we always have the 13th annual conference in just about every subject under the sun. And so it is by simple mathematical logic and numeracy that the International Online Information Meeting reaches the number 13. Being a great one for symmetry and such things I wanted to have 13 people on the Advisory Committee and 13 themes for you to choose from — but then I thought this might set a precedent and get a little out of hand. I mean when we reach the 25th International Online Information Meeting do we want 25 people on the Committee and 25 themes? I don't think so!

I have mentioned before that the International Online Information Meeting has spawned similar online meetings in many parts of the world and it is truly gratifying to see one being organized in Moscow later this year. Such meetings bring individuals from many different organizations and countries together in a process of give and take, teaching and learning, buying and selling. The cooperation and exchanges that thus go on at the Meetings create an enduring worldwide web of dependency and support which serves to strengthen and bind the fundamental structure of society not only the information industry.

In life there are winners and losers and

Themes

In keeping with previous years, the 13th Online Meeting will consist of both unsolicited and invited papers in a wide range of themes. Themes in which papers are particularly sought are given below and, as usual, these are given for guidance only. There is always room for good, research-oriented, papers on comparisons of databases, networks, search languages and techniques, costs and pricing, performance and reliability. Thoughtful and thought-provoking papers giving practical experience and reasoning are preferred to more descriptive papers. The quality of many papers submitted to previous Online Meetings left much to be desired and the Advisory Committee and Paper Reviewers will be strict when making their assessment and recommendation of acceptance. It is anticipated that there will be a panel session looking at database publishing (online CD-ROM and print products) from the publishers' point of view and covering such aspects as selecting products to publish and the most appropriate media: financial principles, costs of publishing, marketing considerations and the like.

Suggested themes for Online Information 89

INFORMATION ANALYSIS

Its role in R&D; information analysis centres; information analysts as part of research team; methods and techniques (including online) used in information analysis

GEOGRAPHIC INFORMATION SYSTEMS

Mapping; image processing; CD-ROM systems; global databases; GRID; remote sensing data; census statistics; data acquisition problems; workstations

SPEECH INPUT/OUTPUT

Audiotex; voice messaging; voice notes to documents; vocabulary pronunciation on CD-ROMs

SEARCHING FOREIGN LANGUAGE DATABASES

Linguistic problems; problems of searching in foreign languages; problems of understanding; content analysis; is the content worth searching; particular reference to Japanese, Russian, Arabic databases

USER INTERFACES IN MULTIMEDIA SYSTEMS

WIMPS; interface design; human computer interaction; guidelines, principles; ergonomics; comparisons of input devices (mice, touch, tablets, light pens, roller/track balls etc)

NETWORKING FULL-TEXT AND MULTIMEDIA DOCUMENTS

Problems of transferring full-text and multimedia documents over networks; locally, nationally and internationally; solutions; systems

ONLINE IN THE COMMUNITY

How online can be used to enhance community life and work; electronic villages; distance learning; electronic bookmobiles; community information services

REAL-TIME, TRANSACTIONAL AND REFERENCE SYSTEMS

Systems and services; pricing structures; historical (reference) data; techniques for stock exchange and dealing; workstations; end-user behaviour

Online Information 89

Sauli Laitinen
VTT Technical Research Centre
of Finland, Finland

Anne Morris
Loughborough University, UK

Shawky Salem
Arab Centre for Medical
Literature, Kuwait

Martha Williams
University of Illinois, USA

oubtless the number 13 will be unlucky
or some — but at 13, the International
Online Information Meetings are still
urging ahead forging out new paths on
rich producers, suppliers, designers,
onsultants and users can meet, form and
uild on the lasting relationships which
nderlie the information industry as a
whole.

'S. At last year's Meeting we had a great
uccess with the Hyper Card stack
repared specially for the Online Meeting.
his year, we plan to have a special area
et aside where you can show any
ypercard stacks that you have
eveloped. If you want to do this please
heck the appropriate box.

ONVERGENCE OF ONLINE, LIBRARY
UTOMATION AND CD-ROMs
se of al media in libraries and
ormation centres: CD-ROM versus
online; integrated library systems

EXPERT SYSTEMS FOR ONLINE
nowledge-based systems: knowledge
resentation and indexing; intelligent
arch techniques; expert systems in
rary domains

YPERMEDIA
ypertext/hypermedia concepts; design
sues; query and search techniques;
mparisons of hypermedia with other
chniques of indexing; storing and
rieving data

If you would like to submit a paper, please write to the
Organizing Secretary as soon as possible **AND BY 31 MAY
1989 AT THE LATEST** giving details of your proposed paper,
including title and abstract of at least 300 words. Remember
your abstract is the key to whether your proposed paper is initially
accepted or rejected, therefore it is in your own interest to make sure
it is as detailed as possible. If your proposed paper is provisionally
accepted, you will be asked to submit a typescript of the complete
paper **BY 31 JULY 1989 AT THE LATEST**. Please note that papers
must be presented in English and will be subject to stringent
refereeing procedures. Accepted papers will be published in the
Conference Proceedings and authors will receive 25 offprints of their
contribution.

AUTHORS

- ☐ I wish to offer a paper (title and synopsis below)

EXHIBITORS

- ☐ I would be interested in exhibiting.
Please send me further details.
- ☐ I wish to offer a product review (title and synopsis below)
- ☐ We have developed a HyperCard Stack and are interested in
demonstrating it.

SPECIAL SESSIONS OR SEMINARS

- ☐ I would be interested in organizing a special session or seminar.
Please give brief outline and names of potential speakers.

DELEGATES

- ☐ I would be interested in attending the conference
- ☐ Please send me further details when available (September 1989)
- ☐ Please send me further details of the 10th National Online
Meeting to be held in New York from 9–11 May 1989.

MY ADDRESS IS AS FOLLOWS: (BLOCK LETTERS PLEASE)

Prof/Dr/Mr/Ms. (delete as appropriate)

Given Name _____

Surname _____

Organization _____

Department _____

Postal Address _____

Post Code _____ Country _____

Signature _____ Telephone _____

Title of Paper _____

Author(s) & Affiliation(s) _____

PLEASE ATTACH A SYNOPSIS OF UP TO 300 WORDS

Return to:
The Organizing Secretary, Learned Information Ltd,
Woodside, Hinksey Hill, Oxford, OX1 5AU, England

ONLINE INFORMATION 89

① 人口知能応用国際会議—第6回 IEEE 会議 The Sixth IEEE Conference on Artificial Intelligence Applications

開催期間 1990年5月5日～9日
開催場所 米国カリフォルニア州サ
ンタバーバラ

発表内容

1. 重要な問題の解決に応用され、
かつ、有用な手法の開発を刺激
した知識ベースのケース・スタ
ディ
2. 知識ベースの基礎であり、かつ、
現実の世界に対して意欲的に応
用できる AI に関する技術及び
原理

連絡先: CAIA - 90
IEEE Computer Society
1730 Massachusetts Avenue,
NW
Washington, DC 20036 - 1903
Phone: 202 - 371 - 1013

(注) 発表者原稿の受付は1989年9月29日で
終了した。

(出所: 「発表者募集の案内」)

① データベース・ウィーク '89

(社) 情報処理学会 (IPSJ), または,
(財) 東都高度技術研究所

(ASTEMRI/Kyoto) の主催で, (1) 第1回
演緯・オブジェクト指向, データベース国際会議
(DOOD' 89), (2) DOOD チュートリアル,
(3) アドバンスト・データベース・システムシ
ンポジウム (ADS シンポジウム),

(4) 近未来 DB 技術展を次の日程で開催

12月3日(日) DOODチュートリアル

4日(月) DOOD'89

5日(火) DOOD'89近未来DB技術展

6日(水) DOOD'89近未来DB技術展

7日(木) ADSシンポジウム近未来DB技術展

8日(金) ADSシンポジウム

(出所: 「情報処理学会誌」8月号)

学協会ニュース

研究フォーラム「タンパク質研究の新しい潮流」が平成元年6月20日(火)午前10時より午後6時迄東京理科大学において、大学、企業の研究者約60～90名の参加を得て活発に行われた。この研究会は情報知識学会、日本蛋白質学会、桐蔭学園、横浜国立大学の後援により、理化学研究所、国際フロンティア研究システムのバイオメディア研究公開フォーラムとして行われたものである。カリフォルニア大サンディエゴのR・F・Doolittle教授の特別講演をはじめ8演題が行われた。演題の約半分は蛋白質工学、

またその他の半分は情報論的な面を中心としたものであり、勿論両二面は相互に関連したものであった。蛋白質のデータベースの先駆者のDoolittle博士はデータベースを駆使して哺乳類の血液蛋白質の進化を論じ、GenBankの創設に関与した京大の金久教授は蛋白質、核酸の機能予測をする知識データベースについての新しい試みを紹介した。また次回は蛋白質工学に対するデータベースの構築について提案をした。

東京理科大 次田 皓

企画・編集委員会の活動

学会が設立されて動き出すまでには、様々多くの仕事がある。そのため、本委員会は企画と編集を共に行うものとして設定され、名称も企画・編集委員会となった。実際、始めのうちは学会活動の企画なども併せて検討していた。もっとも、その後企画担当理事が決まって、そちらの方で企画が考えられるようになり、また編集関係の仕事が増えてきたため、本委員会の仕事は編集が主になってきている。

特に最近では学会誌に関する検討が行われている。本学会では単に学会誌を印刷出版するのではなく、まず全文データベースを作成し、その一形態として学会誌を印刷出版する方針を立てた。そして、この分野の国際規格である SGML を学会誌としては初めて採用し、凸版印刷の御協力を得て種々の検討を行っている。なお、SGML とは Standard Generalized Markup Language の略で、国際規格 ISO の番号 8879-1986 が与えられている。これは、タイトル、著者などのデータ項目を示すタグを地の文章に挿入することによって、データベース化と印刷に対応しようとする規格である。SGML は欧米では広く使われているが、日本では未ださほど知られていないようである。

学会設立から一年半、本委員会の開催回数も 10 回を越えている。ニュースレターの紙面を借りたこの機会に、これまでの活動をまとめて報告することにしたい。

第 1 回は設立 3 ヶ月前であり、準備会、顔会わせといった感じであったが、出席者一同が持つ設立への意欲が強く感じられる会であった。第 2 回は設立総会直前に行われたが、遠方からの委員も加わり、今後の発展が予感される会であった。第 3 回以降、様々なことを検討し、決定していった。やらなければならないことが山積している一方で時間はないため、走りながら考えざるを得ない状況であったが、各委員と事務局の御尽力により、次第に軌道に乗ってきた感じである。会員各位の一層の御支援を願いつつ、下記に委員会審議の概略を示すこととしたい。

第 1 回 企画・編集委員会

1988 年 1 月 26 日 17 時 15 分 - 20 時

東京大学工学部原子力工学科会議室、13 名出席
議事概略

1. 藤原譲、岩田修一両氏により情報知識学会設立準備の経過報告があった。
2. 出席者の自己紹介が行われた。
3. 情報知識学会のあり方や活動について種々意見交換した。
4. 次回は 4 月 14 日の設立総会の前に行うこととした。

第 2 回企画・編集委員会

1988 年 4 月 14 日 15 時 30 分 - 16 時 50 分、学士

会館本館会議室、13 名出席

議事概略

1. 前回議事録の検討承認
2. 本学会のコミュニケーション形態について
ニュース・レターと学会誌を発行することを決め、また、メールや BBS (Bulletin Board System) などコンピュータを使ったネットワークについては適用可能性を調査することとした。
3. ニュース・レター発行について
設立総会の 6 ヶ月後から発行することとし、それまでのスケジュールを決めた。
また内容項目の案を考え、それぞれ担当者を決めた。
4. 学会誌について
各分野の投稿規定を調査し、本学会誌の投稿規定案の作成することとした。
5. 次回日程の決定

第 3 回企画・編集委員会

1988 年 6 月 3 日 18 時 - 21 時、学士会館本郷分

館会議室、15 名出席

議事概略

1. 前回議事録の検討承認
2. 原稿執筆の手引について
原案を検討した結果、次のように決めた。
・学会誌とニュース・レターは分けて考える。
・今日出た意見を参考にして、さらに検討する。
決定した投稿の手引はニュース・レターに載せる。

3. ニュース・レター第1号発行について

・ニュース・レターのタイトルの案を作成し、次回に決定する。

・ニュース・レターのフォーマットは、B5版2段組み1段22字42行とする。

・ニュース・レターの内容項目として、目次、学会設立にあたって、発起人総会と設立総会の記事、研究紹介、BBSからの情報、学協会便り、とおきの役に立つ話、随想欄、国際交流ニュース、特別講演メモ、会員の声、新入会員、編集後記などを考える。

4. 米田会長執筆の『情報知識学会の設立にあたって』について

会長からの「徹底的に加筆してほしい」との連絡により、検討した結果、一部加筆することとなり、その案を作成して、次回決めることとした。

5. 1989年情報学シンポジウムについて

本学会も共催する標記シンポジウム（1989年1月17、18日に開催予定）について説明があった。

6. その他

会長印を作成し、郵便振替の口座番号を設定した旨の報告があった。

7. 次回日程の決定

第4回企画・編集委員会

1988年7月18日18時－21時、学士会館本郷分館会議室、15名出席

議事概略

1. 前回議事録の検討承認

2. 1989年情報学シンポジウムについて

シンポジウムの準備状況の説明があった。

3. ニュース・レター第1号発行について

原案を検討し、誌名とその大きさ、ISSN（国際標準逐次刊行物番号）の付与、第1号の体裁、割りつけパターンの重要性、投稿は紙の原稿かカメラ・レディーかフロッピーか等々を議論した。

4. 米田会長執筆の『情報知識学会の設立にあたって』について

加筆した案のとおり了承された。

5. ニュース・レター第2号以降について

第2号－第4号までの原稿締切日を決め、研究紹介欄の執筆者を検討した。

6. 学会誌について

当面は年1回発行で検討することとした。また、学会誌については分野でイメージが異なると考えられるので、検討ワーキング・グループを作って検討することとした。

6. 次回日程の決定

第5回企画・編集委員会

1988年8月31日18時－21時、学士会館本郷分館会議室、14名出席

議事概略

1. 前回議事録の検討承認

2. 学会誌について

学会誌は印刷、校正の手間を掛けずに済む方法を検討することとした。

3. ニュース・レター第1号発行について

刷上がりイメージに割りつけされた第1号の案について種々検討し、一部改善することとした。

また、ISSN（国際標準逐次刊行物番号）の登録の仕方の紹介があり、早速手配することとした。

5. ニュース・レター第2号以降について

受付原稿の確認、原稿締切の確認などを行った。

また、これから原稿をいただく分については執筆依頼を出すことにした。

4. 情報知識学会の入会案内について

原案を検討し一部修正した後、了承し、早速印刷配付することとした。

6. 次回日程の決定

第6回企画・編集委員会

1988年11月9日18時－21時、学士会館本郷分館会議室、11名出席

議事概略

1. 前回議事録の検討承認

2. 1989年情報学シンポジウム

決定したプログラムの紹介があった。

3. ニュース・レター第1号について

第1号を印刷し、設立発起人宛に本学会の入会案内と一緒にして発送している旨報告があった。また、各委員から第1号についての意見や感想が述べられた。

4. ニュース・レター第2号について

原案を検討した結果、巻号表記については、表紙は1月1日号、奥づけは巻号表記(2-1)とすること、総頁数は16頁とすることを決め、各欄について原稿の入手状況の確認と執筆者と締切の確認を行った。

4. ニュース・レター第3号以降について

当面、年4回発行で、1, 4, 7, 10月の1日に発行すること、表紙には〇月1日号と表記することとし、研究紹介欄については電子出版シリーズの企画を決めた。

5. 学会誌の内容について

学会誌検討WGから、個別の論文以外に、広い分野で共通の話題となるようなシリーズものを作っては如何かとの提案があり、この企画を進めることとした。

6. 学会誌の発行体制について

某出版社から制作業務の請負の話がある旨報告があり、資料を取って次回さらに検討することとした。

7. 本学会の運営について

米田会長と藤原議事より、近いうちに理事会を開いて、部会、企画・事業、予算の件などを検討することとし、その日取りは別途決めたい旨の発言があった。

8. 次回日程の決定

第7回企画・編集委員会

1989年1月6日16時-21時、学士会館本郷分館会議室、11名出席

議事概略

1. 前回議事録の検討承認

2. ニュースレター第2号について

事務局より、従来の表紙の形式では巻頭言の後ろの空が目立ってしまうこと、印刷の単位である16頁を越えてしまうこと、などの報告があり、検討の結果、第2号から表紙の形式を事務局案のとおり変えることとした。

3. ニュースレター第3号について

各欄の執筆者の決定と確認を行った。

4. 論文誌について

論文誌の構成案について種々検討を行った。また、分野ごとに担当の委員を決めた。

5. 論文誌の印刷について

某社が編集した単行本や雑誌が回覧された。種々検討したところ、フロッピー入稿でSGMLを使って全文データベースと印刷物を同時に作っては如何かとの提案が出て、学術情報センターとの共同研究を行っている凸版印刷から案を出していただいて検討することとした。

6. 理事会の報告と学会活動について

米田会長から過日開かれた理事会の報告があり、また、研究会や部会の設立提案を願いたい旨の発言があった。また、これら部会や委員会の活動を支援するために、会費支出の規則について総務担当理事と会計担当理事で検討することとした。なお、会員拡充のために情報学シンポジウムでニュースレターと入会案内を配付することにした。

6. 次回日程の決定

第8回企画・編集委員会

1989年3月17日17時-21時、軽子坂MNビル会議室、16名出席

議事概略

1. 前回議事録の検討承認

2. 理事会の報告

2月6日に行われた理事会の報告があった。

3. 論文誌の印刷について

凸版印刷の田中洋一氏から、SGMLに従った原稿作成の規則と、作られた原稿がソフトウェアによってどのように変換されて行くかについて説明があった。これに対して、質疑応答と検討の結果、著者にはなるべく負担を掛けないこと、ボランティアによる編集事務を入れてやることなどを決め、次回にさらに詰めることとした。

4. 学会誌の内容と原稿依頼について

討論論文について、依頼状案を作成したこと、執筆者の内諾状況について報告があった。また、投稿論文については執筆者の推薦があった。

5. ニュースレター第3号について

事務局より入稿状況の報告があり、ニュース欄の原稿を追加することとした。

6. ニュースレター第4号以降について

各欄について担当者を決めた。

7. 次回日程の決定

〈次号につづく・文責 石塚英弘〉

シンポジウム「化学における情報の現状と将来」プログラム

- 日 時：1990年1月19日（金） 10:00-17:00
 会 場：日本学術会議 大会議室（2階） 営団地下鉄 千代田線 「乃木坂」0分
 東京都港区六本木7-22-34 ☎03-403-6291
 主 催：日本学術会議化学研究連絡委員会
 共 催：日本化学研究会・日本化学会情報化学部会・日本農芸化学会・日本薬学会・日本分析化学会・
 化学工学会・高分子学会・情報知識学会・化学情報協会・日本科学技術情報センター
 趣 旨：化学の全ての分野で、文献検索、事象検索、物性推算、図形処理、分子設計、反応設計などの
 各領域にわたって、化学に関する情報、特に計算機による情報処理が活用されている。
 しかしながら、その利用の基盤となる、知識ベース・システムなどの新しい情報の取扱方の
 発想、データベースの構築や計算機プログラム・システムの開発は、わが国においては諸外
 国、特にアメリカにくらべて、著しく遅れていると言わざるを得ない。
 特に大学等で化学情報学、情報化学の各基礎的領域での発想の展開・構築・開発・流通を
 促進することが必要であると考えられるので、小規模なシンポジウムを開催して、これらを
 促進する方策を討論・検討したい。

プ ロ グ ラ ム

- 10:00 開会の挨拶：田丸 謙二（東京理科大学・日本学術会議化学研究連絡委員会委員長）
 はじめに：米田 幸夫（東海大学開発技術研究所・日本学術会議化学研究連絡委員会委員）
 10:20-12:40 講演：
 (1)「化学における情報の役割」 千原 秀昭（大阪大学理学部・化学情報協会）
 (2)「化学情報の研究促進と教育」 佐々木 慎一（豊橋技術科学大学副学長）
 (3)「企業における化学情報と大学の研究・教育への要望」 吉田 元二（住友化学工業㈱）
 (4)「化学のデータベースと知識ベースの開発と普及」 藤原 譲（筑波大学 電子・情報）
 13:30-15:20 講演：
 (5)「有機合成化学の研究における諸問題」 野依 良治（名古屋大学理学部）
 (6)「薬学における情報の諸問題」 梅山 秀明（北里大学薬学部）
 (7)「化学工学における情報の諸問題」 大島 栄次（東京工業大学資源化学研究所）
 (8)「農芸化学における最近の諸問題」 太田 隆久（東京大学農学部）
 15:30-17:00 パネル：「化学における情報システムを進展させるには？」
 パネリスト：千原 秀昭／佐々木 慎一／吉田 元二／藤原 譲／野依 良治／田中
 信行（東北大学名誉教授・日本事務機器㈱）／藤原 鎮男（神奈川大学）
 コメンテータ：田岡 三生（東京大学理学部）／荒木 啓介（日本科学技術情報センター）
 司会者：米田 幸夫
 17:00 閉会の挨拶：米田 幸夫

参加費：無料、資料実費 1,000円

なお準備の都合上、参加ご希望の方は1990年1月12日までに下記へはがきでお申し込みください。
 宛先：〒106 東京都港区六本木7-22-34 日本学術会議事務局 化学研究連絡委員会

編集後記

ニュースレター第5号、大幅に遅れて申し訳ございませんでした。一年目は、当学会の存亡は『ニュースレター』にありとばかりに、4号まで順調に発行できましたが、二年目に入り編集委員の間で緊張が少しゆるんだのかも知れません。新生の情報知識学会にとって、定期的に『ニュースレター』を発行することの意義について前回の企画・編集委員会で確認しました。第6号は、『情報知識学会シンポジウム特集号』としてお届けする予定です。

当学会の発展にとって論文誌の刊行は重要な役

割を担うわけですが、現在、創刊号発行の準備が進められています。誌名は『情報知識学会誌』、
 ‘Japan Society of Information and
 know-ledge Journal’
 と決定しました。

当学会は守備範囲が広く、研究対象も多いことから、様々な立場の方々と接点があると思います。会員の皆様が普段研究し、または、日常業務で扱っているテーマを材料として何か新しいものを出し、それを大きく育てられるような『新しい知識の創出の場』を作ろうではありませんか。

三菱総合研究所

曾我部